

座古愛子のキリスト教理解と信徒伝道・続 座古愛子の後期著作

岩野祐介

女性キリスト者座古愛子

本稿では主に、座古愛子(1878-1945)の後期の著作、「伏屋の曙 続々篇」「事実小説 不知火」及び小編「豚に真珠」について扱う。これらの著作は、昨年度本誌前号に座古についての研究ノートを発表した時点では確認できていなかったものであり、これらを通して新たに明らかになった事柄もあるため、補完するような形で、ここで発表させていただきたい。

今、座古愛子について改めて知ることの意義については前号において述べたので、ここで改めて繰り返すことはしない。¹ 筆者の意図を簡潔に記しておく、教会・キリスト教共同体の内実を知るため、信徒や教会員のことを知ろうとする試みの一環であるということになる。また、信徒による伝道や宣教の試みを掘り起こし再考する手立てということでもある。

『伏屋の曙 続々篇』

『伏屋の曙 続々篇』は、1935年に東京の出版社独立堂より刊行された座古の著作である。2012年現在、国会図書館により電子データ化されているが、国会図書館に行かなければ閲覧することはできない。本書は『伏屋の曙』『伏屋の曙続編』『闇より光へ』に続く座古の自伝であるが、内容的には前三者と重複する事項も多い。本書の執筆に至る経緯について、座古は次のように自序で述べている。

「私の御恩寵談は、すでに二三の著書に依つて、御存じのむきも多々ありませうから、今さら、書くにも及ばぬ、といふ氣でをりましたが最初の著書、伏屋の曙が絶版になつてみて、……続編や、聖翼の蔭なども絶版か手に入らぬ。闇より光へは、中途より後半が詳しく、さらばあれこれを集めて、打て一丸とした物を読ませよ、とよく承り

1 岩野祐介「座古愛子のキリスト教理解と信徒伝道」現代キリスト教思想研究会編『アジア・キリスト教・多元性』(2012、現代キリスト教思想研究会)。

ますので、私も最早六十路に近く、老境にも入り、……

……幸ひ未耳目明らかで、眼鏡を用ゐぬ今、読者のご希望に添ふ物と、遺書の心算で著はしたのがこれ。」²

このように、『伏屋の曙続々篇』は、それまでの続編というより、自伝的著作を改めて書き直したもののとしての性格が強い。なお、本書の序文としてはこの自序のほか、塚本虎二、森本慶三といった無教会主義キリスト教の関係者が文章を寄せている。さらに、内村鑑三が過去に座古の著作『父』に寄せた序文を再録しており、これらのことから、座古と無教会主義キリスト者たちとの関係性は決して薄いものではなかったと推測することが可能である。なお、内村と座古との交流については後述する。

以下、本書の構成について少し紹介しておきたい。目次は次のようになっている。

晴天の霹靂 / 我生ひ立ち / ひま行く駒 / 哀別離苦 / 再婚 / 水難 / 火難 / 盗難 / 病難
/ 移転また移転 / 開かれし学びの門 / 苦難の再来 / 忘れがたみ / 初奉公 / 籠の鳥 /
好機逸すべからず / 継母根性継子根性 / 病魔襲来 / 邪恋か策略か / 貧苦か病苦か /
伯母と蛇薬 / さまざまの教への風 / 此所も火宅 / 死に得ぬ悶へ / 壁に耳あり / 曙光
/ 受洗の喜び / 霊夢

(このあたりまでの記述が大体、『伏屋の曙』の内容と重なる)

何れが幸福 / 尼僧と間違はる / 労働者間の美観 / 求道者の四国巡礼

(このあたりまでの記述が大体、『伏屋の曙 続編』の内容と重なる)

歌まなび / 新築の我家 / 暴風前の静けさ / 窮鳥 / あきなひ / 老人は預言者 / 無より
有を生ず / 罪を犯す勿れ / 谷間の白百合 / 最後の救ひ / 生別あり死別あり / 法廷の
悲哀 / 打続く死別 / 洩れなく救はる / 最後の試練 / 新ヨルダン川

(これらの記述は他の著作と重なる部分もあるが、本書において新しく記された内容もある)

このように本書は、座古の誕生から、神戸女学院を去り須磨の月見山へ移る時期までを記したものとなっている。なお『伏屋の曙』『同 続編』とは異なり、本文に含まれた

2 座古愛子『伏屋の曙 続々篇』(1935、独立堂)自序、ページの表記なし。(目次のあとの9-10ページ目に該当)なお引用にあたって、旧字体の漢字は新字体に直して引用してある。また、難読と思われる箇所以外のルビは省略した(以下も同様)。

ものを除いて、韻文は収録されていない。また聖書の語句や賛美歌の歌詞が引用される箇所も『伏屋の曙』『同 続編』と比較すると少ない。

座古のキリスト教理解 自らの伝道について、また教会について

本書においても、他の著作同様座古のキリスト教理解をうかがい知ることができる部分が多く、これらは非常に興味深いものである。中でも、彼女の教派性に対する理解は実に特徴的なものであるので、以下に少し紹介しておく。

座古は神戸女学院の購買部に住み込みで働いており、そこで毎日祈禱会をおこなっていた。ではそれに関して、女学院を創立したミッションの宣教師たちはどのような態度であったのだろうか。

「神戸女学院は、ミッションスクールであり、組合派であります故、本当いへば私が伝道した僕さん達は皆組合教会へ、御紹介すべきであります、宣教師方は極めて寛大で僕さんに、教会へ行けといふとも、きうくつがつかないから、折角院内に住み乍ら、救ひに洩れる。毎朝礼拝をし、日曜には一層教へ導け。との御使命によつて来たもので、一度任かした以上は、どういふ伝道振りでも、あへて干渉せず。といふ態度でありますから、甚だ伝道がしよいのであります。」³

この座古の理解が正確であるとすれば、ミッションの宣教師は「極めて寛大」であった、ということになる。面白いのは、座古自身が、神戸女学院は組合派であるから日本組合教会に所属する教会へ紹介するのが本筋であると理解していながら、教派性よりも、「きうくつ」でないことを重視していた、ということである。では、教会を窮屈に感じるという彼等はどのような背景の人々であったのだろうか。

「僕さん達といひましたが、男ばかりでは無く、女中さんやコツクさんや、門番さんなど、先八九人であります。皆己々信仰(本文ママ)(?)を持ち、内證で、稲荷さんを祭つてゐる者あり、金光教へ夜分にまゐる者あり、又無信心もありですが、これを軽蔑せず、其信仰心の向を、かへさず様に盡せばよいという風に、宣教師方がそしらぬ顔してゐられるので、イライラコセコセされるよりは、暢気に気長く伝道が出来て、少しも無理が出来ません。……」⁴

3 同前、305 ページ。

4 同前、305-306 ページ。

座古によれば、彼らはそれぞれ自分の信仰をもっていたり、あるいは無宗教であったりする人々であるのだが、そういった他宗教に対する信仰を「軽蔑せず」、しかしその向きを変える、ということが座古の狙いであったのである。すなわち、座古は他宗教の信仰心を否定してはいない、ということになる。これは考えようによっては非常に寛容な態度である。そして座古の「暢気」で「気長い」伝道により、参加者の中から時折洗礼希望者が出ることもあったというのであるが、その際の座古の対応も、また非常に興味深いものである。

「己々の気風に合ふ教派に、紹介致しました。此人は物静かであると思へば、イエスキリスト教会へ、賑やかで無いと物足らぬ人へは、ホーリネス教会へ紹介して、其教会で洗礼受て、教会員に加はるといふ様にしてみますが、あまり教会員には成度られません。校僕、校婢の我れ等が、堂々たる紳士淑女の中へ混つてなど階級が違ふといふ、自ら卑下するのであります。それで始め丈で、次第に教会へ遠ざかり、はては、折角の信仰も失なひ、再度もとへかへすのが、なかなか六ヶ敷いのであります。」⁵

ここでの、座古の極めて自由な教派観には、驚かすにはいられないものがある。と同時に、一般の信徒、教会員の目に、最初に触れるのはいかなる要素なのか、ということを知る資料としても極めて興味深いものである。それは、教派それぞれの神学理解上の特徴よりも、厳粛で静かか、情感豊かで賑やかか、といったことであった、というのである。もちろん、その厳粛さや情感の高ぶりといった要素は、当然ながら神学理解上の特徴に由来するものではあるだろう。しかし、プロテスタント各教派教会の歴史的背景を知らない一般の日本の信徒にとって、それがまず単純な静かさ、賑やかさとして感じられることは、当然のことである。

また、それら教派教会が「紳士淑女」のものである、という表現は、一般的によく言われる「日本のプロテスタントキリスト教は都市部のインテリ層中心に広まった」という言説を裏づけるものであるが、同時に、牧師がどうであるか、説教がどうであるか、といったことと同等（あるいはそれ以上）に、他の教会員がどのような人々であるか、ということが問題となる、ということはこの記述は明らかにしていると言えるだろう。教会は、神と信徒の関係、神と牧師の関係だけで成立しているわけではないのである。また、この記述から、前述の「宣教師たちは寛容であった」ということに関して、購買部の住み込み店主である座古や、「紳士淑女」の間では恐縮してしまう「僕さん」たちのような層の人々の行動について、宣教師たちはあまり気にしていなかったということな

5 同前、307 ページ。

のではないかと推測することも可能であるように思われる。

さらに、洗礼を受けることよりも、信仰を維持することの方が難しいということを経験的・直感的に理解していることにも注目すべきであるだろう。この洗礼についても、印象的な言葉を座古は本書に記している。

座古のキリスト教理解 洗礼について

座古は洗礼についてどう考えていたのだろうか。

「洗礼といふものも、心さへ救はれたら、儀式など、どうでもよいとの説もあれど、ある方がよいかと思ひます。同じあるならば本式の浸礼の方がよいかと思ひます。信仰に入つた時の深い印象は、一生忘れる事の出来ぬものであるからです。」⁶

座古は確かに無教会主義者と交流をもち、内村の影響を受けてもいたが、本人は洗礼を受けた教会員である。そしてその座古は、受けるのであれば洗礼よりも「本式の浸礼」がよいというのである。その理由として座古が挙げるのは、「一生忘れる事の出来ぬ」「深い印象」である。すなわち、神学的・教義的な位置づけよりも、心に刻まれる印象を重視していると考えられるであろう。このことも、一般の信徒の立場からすれば、当然なことであると考えられる。

そこで座古は、洗礼希望者があつた場合、川で浸礼を受けることを彼らにすすめたのである。

「そこで、数名バプテスマの志願者があつたら、例の前田氏にたのみまして、山間の子滝で浸礼を授けて頂く事になりました。市内ではさういふ場所が得難いのを、青年方数名して、絶好の霊地を見付けて来て下さいました。

湊川を逆行すれば、切り取つた様な崖道に添ひ、山間に入ります。そこに池の如きがあり、中に石が飛び飛びにあり、それを渡つて向かふへ越せば、水道の水源地よりの溢れ水が小滝となつて、ドウドウと流れ落ち、滝壺ともいふべき岩の窪みは、座して胸迄あり、其前には平たい大岩があり、其上に七八名は列べます。こゝで滝音の樂に和して、讚美、祈祷捧げて、滝壺へザブツと、浸されるのであります。理屈は兎も角、先づかういふ式を受て、水から上つた時、聖霊鳩の如き形を為して、頭上に降る心地がするであります。」⁷

6 同前、307 ページ。

7 同前、308 ページ。

座古はこの場所を「霊地」と表現しているのであるから、自然の中に霊的なものを感じているということになるであろう。このような、自然観を土台としたキリスト教理解は内村とも共通する、無教会主義的なものと言うことが可能である。内村にとっては世界全体、宇宙全体が教会だったからである。

また、受洗を「印象深い」体験とする手立てとして、座古は「洗礼衣」を用意していたという。

「其時着る衣を造ります。晒木綿に相知る程の信者から己々の御愛読聖句を書いて貰ひ、両襟には姓名と、受洗の年月日を書いたのを、着せます。これは仏教でいふ経帷子で、一生大切に保存しておき、召されて世を去る時は、紋服なり何なり着た上に、此洗礼衣を着て、主のみもとに行くのであります。」⁸

「受洗後は好む教会に加はりなど、加はらぬなど、自由にまかす方針でかなり沢山の人が新ヨルダン川で、バプテスマを授けられました。」⁹

座古はここで他宗教の用語を用いて洗礼衣を「経帷子」に例えている。このような「もの」の捉え方は、神学的に厳密な立場からすれば、偶像崇拝的な要素として好まれないかもしれないが、庶民的な信仰表現の特徴が表れているようにも思われる。また、他の信徒から聖句を書いてもらうという行為は、信徒間の横のつながりを重んじていることの表れであると考えられる。このような、信徒同士がどのように関わっていたか、ということは、指導者に焦点を合わせた歴史記述からはこぼれ落ちやすい要素として、見逃せないものである。

神戸女学院より須磨へ

本書によれば、座古は1933年に神戸女学院から須磨の月見山へ移転している。

「昭和八年三月二十八日、早朝より起きて先、我神に、長年此所にて、御愛くしみの聖手にはぐゝまれ、幾多の患難に遇ひ、それに上越す御慰めを賜はり、最後の試煉は、やはりヨブに來りし如く肉体を打たれる事で、俛転覆の時すでに死ぬべかりしに、助けられ、ドクターの見立をくつがへして、中風には罹らず、手にも舌にも運動させ、一日数時間の執筆にも堪へ得る迄に強められ、舌には福音を語るに事欠かず、時には

8 同前、308-309 ページ。

9 同前、309 ページ。

悪口雑言をさへ吐く、恐れ多い事であります。...

...こんなに考へつゝ須磨月見山の住家に着致しました。」¹⁰

須磨に移ってから、座古は自宅で伝道していたことが確認できる。それは、子どもたちを相手にした、日曜学校であった。

「今日迄幾多の苦難の中より、助け守りたまうた神が、末の一段になつてから、見棄て給ふ事なしとの信仰に立つて、相変わらず筆の働きと、日曜学校を我家に開いて、子供のうちから神との関係を、深く結ばしておくが大切な事と、昨秋より始めました。

クリスマスはなかなかの盛会で、爪も立たぬといふ大入満員、子の可愛さに母御まで、牛に曳かれて善光寺詣りの、押かけ結寄せ、私の前にも人垣が出来て、一目も舞台が見えません。見ずして喜び、大感謝でありました。

救はれし者は境遇が変れば変つたところで、教への種パチルスを蒔き散らさねばなりません。.....(使徒 24:5).....

十年十五年後には、見事な果を結びませう。さう思ふてはゆるかせに出来ません。」¹¹

中村久子の「慈光に照らさる」によれば、この日曜学校はその後も続いた模様である。¹²

なお、本稿で引用してはいないが、本書においても、これに先立つ著書と同様、しばしば夢と夢判断について記されている。夢を、何らかの啓示ととらえ、それを解釈するのである。これは座古の特徴として挙げる事ができるものであり、また庶民的なキリスト教理解のあり方として、興味深いものではないだろうか。

続いては、『事実小説 不知火』について記したい。

『事実小説 不知火』

『事実小説 不知火』は 1936 年、やはり独立堂より刊行された座古の著書である。国会図書館により電子データ化されており、ウェブ上で閲覧可能である。本書は、現在確認できる限りでは、単行本として刊行されたものとしての座古の最後の著作である。

本書は、座古が実際に関わった、紆余曲折を経て芸妓になっている女性を、廃業させ

10 同前、313-314 ページ。

11 同前、316-317 ページ。

12 中村久子「慈光に照らさる」『こころの手足』(1971、春秋社) 236 ページ。「月見山では日曜学校も開かれまして、女史のお心にともしび灯がついたようでした。いつの手紙にもそのことが認めてあったのです。」とある。

信仰にみちびく物語である。この出来事について、座古はすでに『微光』に収録された「彼女の霊は」に記しているが、改めて小説の形で執筆することにした経緯を、座古は次のように序文で記している。

「私は昔、女流小説家に成る可く、勉強せんと思ひ立ち、其頃我教会の牧師、武田猪平先生に御相談申しますと、同師は小説を好まれず、反対の御意見であつた為に、断念してゐました。

武田師が故人になられて、叱られる人が無いから、好きな事をするといふわけではありませんが、小説よりも数奇な運命にもまれた末、不思議な御摂理で救はれ、祈りつつ永眠した。此世的に言へば賤しい一娼婦の一生、何が彼女をさうさせたか、娘節用にもとの老婆心から、九分九厘迄事実で、ほんの一厘だけ尾ひれを付けて、小説体としたのがこれ。」¹³

本書において、登場人物は、少しずつ本名を捻った名前を与えられているようである。例えば座古愛子は、「加古綾子」として登場する。本稿では、座古（加古）の使者がヒロイン松枝を訪ねる場面と、松枝の最期の場面について記しておきたい。

座古の使者がヒロイン松枝を訪ねる

上述の通り、紆余曲折あって芸妓となっていたヒロインの松枝は、偶然の出会いからキリスト教に興味をもち、また座古のことを知って神戸女学院に彼女を訪ねたこともあった。では松枝がキリスト教と出会ったきっかけはいかなるものであったか。

「……此夏の夕方、^{あが}登楼つたお客は、大学生らしいのでありますから、酒もお召しあがられませんかし、…普通のお客には未一度も話した事の無かつた、私の耻ぢ、失敗談を詳しく語りました。さう致しますと、……

『ところで君に勧めるが、今の志を貫徹する為に、宗教の必要が要るね。宗教も種々あるが、先基督教がよからう。僕は未だ基督教をよく知らぬが、聖書といふ經典があつて、人間に真の道を示す標となる。君にそれを買つて贈らう。……』

帰へられてから二日目に、小包で頂いたのが、此の聖書であります。一人研究ではなかなか分りませんが、でも毎日意味を噛みしめ噛みしめ、少しづつ読んで居ますとまた我点の行くところもあり、今では毎日読みませぬと、物足らぬ迄に味が出てまゐりました。殊に、馬太伝五章 四節に『幸福なるかな、悲しむ者、其人は慰められ

13 座古『事実小説 不知火』（1936、独立堂）1ページ。

ん』とあるところに至りましては、私の様な悲しい者に何時か慰められる時期が来るであらうと、あの一句が嬉しくて、幾度読だか分かりません。」¹⁴

このように、松枝にキリスト教を勧めたのが、本人はキリスト者ではない青年である、という点は興味深い。聖書や、キリスト教的な教え、考え方というものが、信徒かどうかは別として知識層にかなり広く浸透していることを思わせるからである。

そこで、座古の使者は松枝と聖書をともに読み、祈り、その後自由廃業するための相談を進めることになる。

山辺（座古の使者）「聖書をお開きになつて、四一五頁を出して下さい。エペソ書四章、二二とある所を読みませう。

……（エフェソ 4:22-24 引用）……

此意味は私共が欲に誘惑されて、誠に見苦しい心の思ひや行為をして来たが、今はそんな穢い物は、裸褌着物を脱ぎ捨る様に脱ぎすて、教への真理てふ倉庫より取り出された、立派な着物、義と聖とを上着、下着に着て、乞食が、一躍紳士または淑女となる有様に形容してあるので、旧き人は罪人たりし己、新らしき人とは、更生した己れ以前の罪穢をキリストの十字架の血潮に、洗ひ潔められて、甦る事なのであります」¹⁵

松枝「有難う御座いました。よく分かりました、穢い裸褌を早く脱ぐ様、心掛けませう」

山辺「然しあなた一人では脱げますまい。女史は脱がせ度いと苦心してゐられます。

今日から脱がして頂く様、祈りを始めなさい。……

斯く言ふ私も、脱がして頂いた一人であります。……」¹⁶

ここでも明らかな通り、座古の聖書解釈は直接的でシンプルなものである。

座古は賀川豊彦（本書では多川徳久）と、もと救世軍仕官の伝道者の協力を得て、松枝を芸妓から廃業させる計画をたて、座古が借金をして資金を用意し、計画を実行する。座古と賀川との間につながりがあったこと、ここでもと救世軍仕官の伝道者が協力することも興味深い。組織や教派のはたらきとは別の次元で、個人の間につながりにもとづく、キリスト教的な関係性ができあがっており、協力して貧困などの社会問題に立ち向かっ

14 同前、100-103 ページ。

15 同前、107-108 ページ。登場人物名は引用者が補ったもの。

16 同前、108-109 ページ。登場人物名は引用者が補ったもの。

ていたことが想像されるからである。

「……彼の有名な多川徳久先生から、一人の伝道者を貸して頂き、……貴女に面会し、其伝道者のもと救世軍の仕官であつたので、自由廃業に就ても詳しいから、都合によつては側から、口添へして、自廃と言ふ道もある事を、ちらと耳に入れて来度い……」¹⁷

芸妓を廃業した松枝は、看護師として働き、また座古のもと烏原水源地で受洗する。その後も紆余曲折があるのだが、最期は病死してしまうことになる。

松枝の最期の言葉

病に倒れた松枝を、友人のお良が見舞うと、松枝は念仏を唱えており、次のように述べたという。

「……私の様な罪深い者は、あまりに恐れ多くて、神のみ許へは迎も行けません。悪人が行く地獄行が当然です。が若し何とか助かる道があるかと、お念仏唱へたのです。

と言ふので私は、『さあそこです、罪人ですからキリストの十字架の尊い御贖ひに預つた、もう全く救はれ 清い者です。忘れませんか、新ヨルダン川で何を受けたのです』と、

言ふと、オ、大切な事を忘れてみました。 どんな罪人も主の^{おんち}寶血の御贖ひによつて清浄な者となり、弥陀の浄土なる神の聖国へ入れて頂ける有難い事を。 極楽は天国であるに、

神様、聖子キリストの御贖ひにより、罪深き者をも、汝の御許に受入給へ、アーメン。」¹⁸

座古は、このような仏教とまざりあったような信仰心をどう考えているのであろうか。もちろん、「弥陀の浄土なる神の聖国」「極楽は天国である」といった言葉は、座古のものではなく松枝のものである。しかし、座古がそれらを敢えてここにこう書くということは、やはり肯定的に捉えているのであろうか。ともあれ、教派教会では否定的に捉えられる混交的要素が、一般の信徒には確かにあることを伝えるものである。

17 同前、105 ページ。

18 同前、169-170 ページ。なお、「おんち」とルビがふられている単語は印刷状態が悪いため読み取りにくく、あるいは、「寶血」かもしれない。

「豚に真珠」座古と、内村鑑三との直接交流

最後に、座古が内村の伝記に寄せた一文「豚に真珠」について若干記しておく。前号に掲載した研究ノートで、筆者は座古と内村の関係を文通にとどまったのではないかと記していたが、これは誤りであったのでここで訂正したい。記述によると、座古は内村と少なくとも二度直接会っている。一度は内村が神戸女学院を講演のため訪れた際であり、もう一度は再臨運動最中の内村の講演を座古が聞きに行った際である。

そのことを記しているのが、益本重雄・藤沢音吉編著『内村鑑三伝 信仰思想篇』に収録された、座古の「豚に真珠」である。内村が神戸女学院を訪ねた際のことについて、座古は次のように述べる。

「故内村先生が数年間に渡つて、主の御再臨を、御熱心に御講演になつた頃の末年、多分、大正九年か十年かの三月と思ひます。

なぜ三月丈はつきりして居るかといへば、神戸女学院に於ては、此頃には、殊に卒業する生徒さん達の為に、信仰を固め、思想を健固にして、社会へ出て働く職業婦人にならうと、異なる信仰の家庭へ嫁がうと、己が持てる信仰は守り続けるといふ、雄々しい婦人たれよとの故か、名師を招いて、御講演があるので、それも生徒方が誰から教へられ度いと、多数決で決めるのが例であります。

其年は、内村先生にとの希望者が多かつたと見え、内村師が見え今講堂で御講演があると聞きまして、大喜びを致しました。

それは昔の独立雑誌から読み続けて今日に至つてゐますので、一度親しく御声咳に接し親しく教へられん事を望み居りました。……

講堂より直ぐ、私の販売部へと見えられました。……」¹⁹

「双方初対面の挨拶がすみ、相語るところは聖書の事ならぬは無く、私もなかなか気焔を挙げたものです、師はフムフムとよく聞いて下さり、少しも反対意見を出されず、御自分の御意見をもまぢへて、談笑たけなは 時の移るを知らずといふ有様、誠に信者といふ者の有難さ、学者の先生と無学な病婦と、一見旧知の如く、兄妹の様に親しい親しい何のへだても無い主の喜び給ふむつみがある此特権重ねて思ふ、信者は有難いと。」²⁰

なお、年代については座古の記憶違いらしく、鈴木範久『内村鑑三日録 10』によれば、

19 座古「豚に真珠」益本重雄・藤沢音吉編著『内村鑑三伝 信仰思想篇』（1936、独立堂）373 ページ。

20 同前、374 ページ。

内村が神戸女学院を訪ねたのは 1918 (大正 7) 年の 3 月 30 日である。²¹ ここでの座古の記述によれば、座古は東京独立雑誌の頃からの内村の愛読者であるということになる。座古は関西在住の庶民層に属する女性なのであるから、東京独立雑誌や聖書之研究の読者に、意外なまでの拡がりがあったことが明らかである。

内村はこの年の 5 月に再度神戸で講演を行っており、座古はこちらも聞きに行っていた。

「……青年会館で、内村師の御講演があると聞き、教友に連れて行つて貰ひました。満堂立錫の地も無い盛会でありましたが、婦人の聴講者は稀であつた為か、教壇より見えたらしく、終ると側へ来られて、
『ヤアー、よく来ましたねえ。飾森君、君が連れて来て呉た！御苦労さん。怪我さゝぬ様に、気を付けて、もつと人が出てから』
と細かいご注意して下さいます。……」²²

座古は内村に会った際、揮毫を依頼していた。そして後日、「仰瞻」「待望」と書かれた二枚の額が座古のもとに届けられることになる。この二枚のうち、「待望」については『伏屋の曙続々篇』にも写真が掲載されており、座古の手元に残ったようである。一方の「仰瞻」は、座古と親交のあった伝道者の集会所に掛けられることになったが、その伝道者はのちに灯台社へ移ったため、内村のような仰瞻的信仰を否定するようになり、その額を処分してしまったという。

こうして座古が『内村鑑三伝』に文章を寄せていることから考えても、座古の言う「兄妹の様に親しい親しい何のへだても無い」関係は決して大げさな表現ではなく、その交流が周囲からも認識されていたということであるだろう。無教会主義キリスト教の拡がりをつかがい知ることのできる貴重な事例であると言える。

まとめに代えて

座古の活動について、今となってはわからないことも多い。筆者は日本組合教会兵庫教会の後身である日本基督教団兵庫教会を訪問させていただいたが、戦災、阪神淡路大震災等もあり、資料は失われてしまっているとのことである。しかし、教会としての取り組みというよりは、武田牧師等の個人的なつながりで座古への支援が行われていたのではないかと、ということは明らかになってきている。『闇より光へ』の夢判断の箇所を登

21 鈴木範久『内村鑑三日録 10』(1997、教文館)、28-30 ページ。

22 前出「豚に真珠」、376-377 ページ。

場する信徒、森本との関係もやはり同様のようである。同じように、座古を信仰に導いた神戸教会会員奥江との関係も、神戸教会とは直接関係のないものだったのではないだろうか。とはいえ、現在の兵庫教会、関西学院教会等の教会員の方には、幼少時座古を見たことがある、という方々がまだおられる。一般の信徒が、座古のもとを訪れることがあったのであり、キリスト者同士、教会員同士の横のつながりが確かに存在していたことを知らしめるものである。

このような個人的つながりは、教派史・教会史的視点からは見えてこない。従って、日本のキリスト教の実像を知るために、座古が残したような資料を掘り起こすことにも価値はあると思われる。特に、賀川に協力を受けていた座古が、一方で内村を「師」と呼んでいる事実は興味深い。無教会主義キリスト教は、もっぱら都市部のインテリ・ブルジョア中心で、社会問題への直接参与からは遠いところにいるのではないかと、という一般的イメージに対して、座古は特例であるのかもしれないが、反例を示すことにはなるであろう。引き続き、座古に関する資料収集と調査を継続していきたいと考えている。

付記

座古愛子について調査する過程で、様々な皆様に色々な形でご協力をいただいたことをここに記し、感謝を申し上げます。特に、涌井徹牧師をはじめとした、日本キリスト教団兵庫教会の皆様、日本キリスト教団甲子園二葉教会の元正章牧師には色々のご協力をいただきました。ありがとうございました。

(いわの・ゆうすけ 関西学院大学神学部准教授)